

三頁、定價各貳圓貳拾錢)(村松)

● 一神論卷第三 序聽迷詩所經一卷

東方文化學院京都研究所編

本書は東方文化學院京都研究所の古書複製事業の一として景教經典にして我國に存する處の二經、即大正六年故富岡桃華氏の藏に歸したる一神論卷第三及び高楠順次郎博士所藏の序聽迷詩所經一卷を複製影印したものである。元來基督教の一派たるネストル教が唐代支那に於て

景教として大に流行したのは明白な史實であるにも不拘古來その經典が全く湮滅して傳らなかつたが爲に、景教の内容形式は勿論、支那に於けるその教義の如きも不明たるを免れなかつたのであつた。然るにかの近年數次に亘つて行はれた中央亞細亞の探險は遂に敦煌石室遺書の發見となり、景教にあつては大秦景教三威蒙度讚、一神論、序聽迷詩所經、志互安樂經、宣元至本經の五が見出されたのである。その諸經典の形式内容に就ては既に屢次羽田博士によつて藝文、東洋學報、内藤博士還曆祝賀

支那學論叢等に於て紹介發表せられ、

史史の貴重なる資料としては是等諸景典の複製は學界一般の要望する處となつたが而もなほ景教三威蒙度讚を除くの外は一として影印に附せられるに至らなかつた。

本書がかゝる際に、東方文化學院京都研究所によつて公刊せられたる所以、意義は今更喋々する迄もあるまい。印刷(コロタイプ)亦極めて鮮明である。鳥の子美濃倍版の唐本仕立て帙に收められてゐる。

尙附するに羽田博士の劃切なる解説を以てし、兩經の要旨を擧げ且その撰述は一神論は貞觀十五年、序聽迷詩所經亦景教傳來の初期に在り共に西方景士の手に成れるを論じ、經中に見出される處の聖書の語句、ソグド語の對音等を指摘せられてゐる。

營に支那史東洋史の専門家に止らず、苟も宗教史、東洋文化に關心ある人士必備の書として薦める。(彙文堂、丸善發賣、實價五圓)(内田)

● 天正遣歐使節記 文學博士 濱田青陵著
切支丹の名は夢を、詩を、憧憬を與へる。一面には中

世日本の衣を剥ぎ、血漉き姿を呈せしめ、近世日本への洗禮を考へしめる。そこに夢と現實との中に彷徨せしめその宗教的情熱は、東亞の域に踟躕せしめた我が國史に世界的に進出せしめる事件の契機となつた。即ちマルコポーロによつて紹介せられた日本の住民を、遠く歐洲の地に實物供覽の最初の標本として赴かしめたのである。

日本人が始めて足跡を歐洲に印したのは、天正十年、九州の切支丹大名大友、大村、有馬の三候が、羅馬教皇に敬意を表せんが爲に使節を差遣した事による。正副使、隨員併せて七名の訪歐使が、波濤を凌ぎ、西班牙王廷に使し、羅馬法王廳に參じ、伊太利を遍歴した此の旅、往復八ヶ年のそれは、あらゆる艱苦を嘗めて遂行せられたのであるが、これは單なる宗教的事蹟なるが故に、又世界史に我が國史を連關せしめた劃期的なものである故にのみでなく、我使節一行がいづれも十三歳より十五、六歳の紅顔の少年であつた事は、更に我等に劇的感興を覚えしめやう。

此の國史上、最初の世界史的事件に關する廣き研究は

明治四十三、四年頃、村上直次郎博士の滯南歐中の古文書館よりの蒐集に始まる。著者濱田博士は二十餘年前、東京帝大の一學生として村上博士の講筵に侍せられ此の使節の事蹟に心を動かし初めてより、再度の外遊はその足跡について無關係、無關心たらしめ得なかつた。不圖昭和四年、伊太利の *Dezza* 氏舊藏なりし此の時の大村純忠の耶蘇會長宛の書狀等、京都帝國大學の有に歸する事あつて、博士の感興と研究とを更に刺戟する機縁となつた。本會が、同年秋「天正年間遣歐使節關係文書」として濱田、新村兩博士の解説を附し、印行頒布したのはこれであつた。その後、大友宗麟、有馬晴信等の同様なる文書の現に彼地の耶蘇會に遺存せられる事、幸田成友博士の調査によつて明らかにされたのであつた。かくて濱田博士の感興は、研究は著しく、麗筆はかつて一書を成した。

第一、日本から葡國まで。第二、葡、西兩國の旅。第三、羅馬への旅。第四、中伊太利の旅。第五、北伊太利の旅。第六、歸路葡國から日本へ。使節後記。を内容と

する。そのうち、第四、第五は雜誌「歴史と地理」に連載されたのであるが、この本文に約百頁に及ぶ註記と、三十通の史料、更に参考文献、使節の肖像畫、使節旅程表を附せられてゐる。諸所に挿入せられた八十葉の圖版、各節に組込まれたる著者自筆のスケッチ、參考圖の多數は、流麗なる文と相俟ち四六版、四百六十餘頁の大冊の讀了に些かの倦怠を覺えしめず、精細に、而も興味の中に理解に導くであらう。

使節の踏破の地はみな宗教と美術の淵藪であつた。使節の接觸せるフェリペ二世、グレゴリヨ十三世、シスト五世みな世界史上著名の人物である。年若く、感受せられ易き使節等によつて我國文化に齎されたであらう直接、間接の、精神的、物質的影響は著しいものであらねばならぬ。近世日本の曉鐘と言へる。

使節後記に述べられたる使節等の關白秀吉への謁見、ワリニヤーニ師の前記三侯家訪問の如き、國史研究者の知らねばならぬ事であらうも、更に四使節等の後半世の節と切支丹の終末とを考へる事は更に心惹くものがあら

う。

近世日本が世界史の舞臺にフットライトを浴びた花やかな姿を、劇的昂奮と、清朗なる情感の中に理解する事を得るを悦ばねばならぬ。(四六版、五・五〇、東京岩波書店)〔寺尾〕

● 律令の研究

瀧川政次郎著

著者は嘗て日本法制史、同社會史、歴史と社會組織の諸篇を發表して種々論題を提供された。今本書に接する時、其等の華々しさを記憶する者には奇異の感をなす程異なる方面の研究を積んでをられる。地味な然し充實した基礎工事にも比すべきこの勞作は對象の無味なるべきに拘らず讀者を強く惹きつける。これは本書が諸論文を明確なる方針によつて整理したものであるため各節獨立の内容を有ら然も全體として一系列をなすてふ構造からも來てゐるよう。内容は總説第一編本邦律令の沿革、第二編日唐律令の比較研究、第三編新古律令の比較研究、第四編律令逸文の研究及び附録として第一律令の柄鑿、第二